

平成26年 №50
秋ひがん号

あきばさん

心に「みのりの秋」を

当山住持

広島県をはじめ、全国各地に大雨・洪水・土砂崩れ・山すべりなど、大きな被害をもたらした暑い夏も過ぎて、ようやく秋彼岸の季節になりました。

被害を受けられた皆様方には、心より御見舞いを申し上げます。

当山では、毎年春秋ともにお中日には恒例行事のひとつとして「彼岸会法要」をお勤めしております。お中日は、春分の日・秋分の日ともに昼と夜の時間が同じになるとされています。

すなわち、太陽が赤

道上の真上に位置し、真東から昇り、真西に沈むというわけです。どこにも偏らない真理ともいえるこの自然現象は、仏教の「中道」の教えにも通じるところがあります。

昔から農業国とされてきた日本の秋は、お米やくだものなどが

発行所
秋葉山 新井寺
272-0144
千葉県市川市新井
1丁目9の1
でんわ047-357-8319
FAX 047-357-8399
mail: info@shinseji.jp
http://www.shinseji.jp
郵便振替 00150-2-282968
発行人 新井寺

稔る収穫の季節でもあります。仏教的には、彼岸は、何かにつけて思うにままならない現実の日常生活から理想の平和な世界への「心の修養期間」です。

どうぞ、檀信徒の皆様におかれましても、秋彼岸の好縁にあたって、平和な彼岸の世界へのお導きである六つの修行の徳目（「六波羅蜜」ろくはらみつ）「布施（へふせ）見返りを求めることなく物心を他に施すこと）・持戒（へじかい）教えを脚下に照らすこと）・忍辱（へんにん）耐え忍ぶこと）・精進（へしやうじん）正しいことに向かってたゆまず努力すること）・禅定（ぜんじやう）身体と心を調えること）・智慧（ちえ）教えにしたがって正しくものごとを見極めること」を正しく学び、実践され、心に稔りの秋（彼岸）を咲かせてください。

合掌



国宝「羽黒山 五重塔」(山形県鶴岡市) 畏敬の念さえおぼえる荘厳さに、しばらくその場を離れることができませんでした。



スマナサーラ長老 特別寄稿

「ひがん(彼岸)よりしがん(此岸)が心配」

お釈迦様の誕生祭「ブツダ・ジャンティ」からご縁を頂戴し、おせがき法要でもご講話をいただいたスマナサーラ長老にご寄稿いただきました。



彼岸(ひがん)より

此岸(しがん)が心配

年二回のお彼岸に、ご先祖様から受けた恩を重んじる方々は皆、彼岸法要を行なってご先祖様に感謝の念を捧げます。これは仏教の伝統です。仏教は単なる信仰する宗教ではなく、世界一高度な文化も持っているのです。仏教徒で文化人であるならば、誰でもご先祖様に対して感謝の念を捧げる法要を行なったほうがよいと思います。彼岸法要を行なう人々は、時代遅れで迷信

に凝り固まっている陰気な人々ではありません。二千年以上続く仏教文化を重んじる、受けた恩を決して忘れない人々なのです。

彼岸法要は日本独特の習慣で、世界の仏教徒が皆行なっているわけではないのです。初期仏教では、「回向」という言葉があります。それは自分が功德を積んで、その功德を他人に与える善行為です。自分だけ幸福になるのではなく、他の人々も自分が行なった善行為によって幸福になって欲しいと祈願する、慈しみの実践なのです。これはお釈迦様が推薦された善行為のひとつです。仏教がインドに現れる以前から、バラモン教では先祖養育するという習慣があったのです。その場合は、神様に供物を捧げたり、ヴェーダ聖典を詠みあげたりするのです。しかし儀式を司るバラモン人は、先祖供養できるのは息子だけだと決めていたのです。これでは、息子が授からない家族の親戚はかわいそうな状態になります。

いかなる問題にも時代を超えた客観的な答えを出すお釈迦様に、この問題が出されたのです。お釈迦様は、息子・娘などに関係なく、ご先祖様に回向するべきだ、という立場でした。しかし、「あの世にいる方々に、こちらからご飯や飲み物などを捧げても届きません。ですから、功德を積んでその精神的な力を与えてください」と教えられたのです。たとえば、仏壇の前にご馳走を用意しておいてもご先祖様は食べません。孤児院にいる子供たちにご馳走をあげるか、それに必要な材料をあげるかします。その時、自分がとても充実感と喜びを感じます。有意義なことをした、という満足感が起こります。功德というのは、このように自分の心に起こる喜びのエネルギーのことです。それから、「この功德をご先祖様に回向します」と与えるのです。これが先祖供養と言います。回向することは、生きていく私たちの間でも簡単にできる行為です。自分の子供が社会貢献して立派に生きていくならば、たとえ寝たきり状態で苦しんでいても、親が喜びます。親の心にも充実感が起きます。それは我が子の善行為の結果が、親の心に入ったということです。それによってその両親は、この世でも幸福を感じるし、あの世でも幸福を受けるのです。これも回向です。



アルボムツレ・ スマナサーラ長老

1945年スリランカ生まれ。13歳で出家。1980年に費留学生として来日。駒澤大学大学院で、奈良康明教授のもと、道元禅師の思想を研究。その後、スリランカと日本両国での活動を経て、1991年に再来日。現在は、日本テーラワーダ仏教協会において初期仏教の伝道と瞑想指導に従事している。「一切の生命をいつくしむことこそが全ての人間の問題の解決策」だと説く。

もし私たちが善行為をして、親・親戚・友人にその旨を報告して「あんたがたの幸福も念じています」と言っておあげたら。一層強い回向になるのです。仏教徒たちの普通の習慣は、「一切の生命が幸福でありますように」と回向することです。しかし親戚のように関係のあるあいだでは、効果は確実です。「他人がどんないいことをしても、私には関係ない」という態度でいる場合は、他人の功德を自分で受けることはできません。彼岸法要の場合も、仏教伝統に則って回向法要をしていただきたいものです。

彼岸のことだけ気にするのは、あまり意味がありません。ご先祖様に怯(おび)えたり、世見の目を気にしたりして彼岸法要を行なっても意味がありません。それは面白くない法要になります。喜びは感じません。法要自体が楽しくないので。彼岸法要は、皆仲良く喜んで行なうべきものです。ただの楽しみも危険です。充実感を伴った楽しみが真の功德です。というわけで、「私たちはいまどのような生活しているのか？」という問題が現れます。悩み苦しみに覆われて、不満を言いふらして生きること、心が暗くなります。それは善行為ではないのです。不善行為です。悪行為です。悪行為の結果、不幸になります。毎日、悩み苦しみに覆われて生きていく人が年二回の彼岸法要に参加しても、あまり喜びと充実感をかんじないのです。義理で嫌々参加するから、その行為も善行為になりません。何をやっても損ばかりする人生になります。ですから、「いま・ここで」幸福に生きることが欠かせない条件です。此岸(し

がん)が心配です。此岸の生き方を失敗すると、彼岸も失敗します。ですから、私たちは彼岸よりも此岸を心配して、充実感を感じるような生き方をしなくてはいけないのです。つねに幸福を感じて生きられるように努めるべきなのです。そうするならば、毎日が彼岸でもあり、此岸でもあります。「日々是好日」とは有名なブツダの言葉です。

秋葉三尺坊大権現

火防大祭のご案内

十一月十八日(火)

できるだけご祈祷をお受けください

◎ ご祈祷の時間

午前 十時半と十一時半

午後 一時半と二時半

○ ご祈祷の時間は多少前後します

○ どなたでもおまいりいただけます

○ 「火の用心」のお札をお授けします

○ 古いお札は「おたき上げ」いたします

○ 古いお札は「おたき上げ」いたします

○ ご不明な点は、お寺へお気軽に

おたずねください

○ ご参詣の上、ご祈祷をお受けいただき、

物心両面にわたる秋葉三尺坊大権現様

のご加護をうけられますよう、ご案内申

し上げます。

おはなの おはなし

「ピンポン菊とアナスタシア」



ピンポン菊



アナスタシア

今年「菊」をテーマに、『おはなのおはなし』をお話してまいりました。第一回は「大菊」、第二回は「スプレー菊と小菊」について。最終回である今回は、「ピンポン菊とアナスタシア」についてお話ししたいと思います。

ピンポン菊は、ドーム型のものと球型のものがあり、色は白・緑・黄色・ピンク・赤・オレンジなど様々ですが、「ゴールデンピンポン」といわれる黄色が主流です。大菊やスプレー菊と同様に、国産と輸入ものがあり、日本では愛知県が主な産地で、輸入ものはマレーシアなどがあります。

アナスタシアは、市場から来るときには、一つひとつのお花にネットがかぶさっています。ネットを取ったときに咲き誇るその姿は感動ものです。色はピンポン菊と同じようなバリエーションがあり、産地も同様です。

ピンポン菊もアナスタシアも葉が弱いのですが、お花自体は日保ちの良いお花

です。花の美しさを活かし、ボリユームのあるお花や葉ものと一緒に花束に入れることをお勧めします。あるいは、葉を取り除き、お花だけをオアシスに挿し、アレンジメントにするのも良いです。水揚げの方法は、余分な葉を取り除き、手で茎を折り、お水がたっぷり入った花瓶に入れます。

ピンポン菊とアナスタシアは、私が仏様を主とした花屋になろうと決意するきっかけとなった花です。主に和装ウエディングやお正月のお花として用いられています。最近ではモダンな仏様のお花にも見られるようになりました。ピンポン菊やアナスタシアが入っているお祝いのお花束を見たとき、「仏様のお花もこうであつたらよいのに・・・」と思いました。

花屋秋葉山では、仏様のお花であつても、生きていく人たちのためのお花と同じ感覚でおつくりするように心がけています。新鮮さを重視し、ときにはかっこよく、ときには美しく。季節感も大切に。秋は菊の季節です。今回の秋彼岸は、大菊・小菊・カーネーション・ヒペリカムをおいれしておつくりしています。このスタイルは、仏様のお花の定番ではありませんが、赤や黄色をメインカラーとし、ヒペリカム（実）を添えることで秋らしさを演出しています。どうぞ、ご利用くださいませ。

花屋 秋葉山 店主しるす

編集後記

実るほど 頭を垂れる 稲穂かな



お米の収穫間近の庄内平野は、頭を垂れた稲穂で黄金色に染まっています。八月の末から半月間、山形県鶴岡市の善寶寺（ぜんぼうじ）専門僧堂様という修行道場で修行をする機会をいただきました。「わたしたちが本気でつとめなければ、雲納（うんのう・修行僧）さんはいきてきません」。そのお寺の維那和尚（いのおしよう・修行僧の指導役）様がおつしやっていたお言葉です。いつも雲納さんのことを思いやり、そのお言葉を実践されるかのように、黙々と行じられていたお姿が心に残っています。言葉を費やして説明するよりも、まず、自分が本気でつとめる。その中には、言葉を超えて感ずる学びがあるのだらうと思います。自分自身が油断をしたり、ぼんやりしては、人を育てることがはできません。自分自身がゆるがせなく、ぎゅっ、ぎゅっつとつとめる、その自分自身の修行が人を育てるということにつながっているのだということ、維那和尚様に教えていただいたような気がします。時節がら、どうぞご自愛くださいませ。

編集小子 合掌